

私と一しょに雨やどりをしませんか

— これからの暮らしを考える動態展示 —

森と木のクリエイター科 森林環境教育専攻 森 一九

1. 研究の目的

自然との共生を目的とし、エコロジカルな意識を求められている現代においても、それを強く意識して暮らすことのできている人は、決して多くはないように思われる。「少し昔の暮らしを振り返り、これからの暮らしを考える」をテーマにより多くの人と共に学ぶ機会を作ることを目的とした。

2. 方法（分散展示から動態展示へ）

岐阜県郡上市の「明宝歴史民俗資料館」では、館外に資料を持ち出し展示する「分散展示」が行われている。私は、触れることのできない資料館、博物館の展示にはつまらなさを感じていたため、資料館の民具資料の再現製作、使用体験を展示し、更に実演を見ていただく「動態展示」を考えた。

3. 展示物および体験コンテンツの開発

動態展示において、来場者が実際に使用できる展示物の製作と体験コンテンツ開発のために、以下のような民具の調査、再現、（製作と使用）を実施した。

- *背板・炭焼き：再現／林地での伐木と運搬、炭焼
- *堅豆腐：再現／豆腐絞り器、豆つき棒、大豆栽
- *わら細工：わらじ、大足、リース／田植え、稲刈り、山歩き等
- *はりぼんぼ：柿渋づくり、竹の伐採、箆籠編み等

4. 動態展示の実施

明宝歴史民俗資料館から民具を借り、岐阜県内4ヶ所で上記4コンテンツについて動態展示を実施した。

10月14日～16日 道の駅 明宝（郡上市）

11月3日 マーケット日和 2022（各務原市）

11月5日 ぎふ信長まつり（岐阜市）

11月12、13日 翔楓祭（美濃市）

7日間の実施でブースを見学した人は約1,000人、声をかけた人は約450人であった。そのうち、実際に体験に参加した人は174人であった。

5. 検証と考察

当初の想定は、今回の動態展示に興味を持つ層は年配や、エコロジカルな暮らしを実践しているごく一部で、少人数であろうというものであった。しかし実施した結果、興味をもち、さらに体験にも参加した人は、普段からエコロジカルを強く意識をしているわけではなく、それに関わる機会があまりない人が多かった。こどもがいる家族が最も多く、特に「藁縄い（わらない）」の体験は、自らやりたいという小学生もあり、全く予想していなかったことだった。

その他、若い男女、サラリーマン、外国人、そしてわらじを履いた高校生など、実に多様な人々が体験に参加した。

会場では、参加者同士が和気あいあいと交流する場面が常に見られた。一緒にする作業、体験により、井戸端会議のような空間が生まれる。見知らぬ参加者同士が教え合い、道すがらのお年寄りが子供に手ほどきを始める。自分の子供が進んでやりたがる姿に驚く親もいた。「そういえば、家で子供に教えることが少なくなかった」と語る父親や、「稼ぐばかりではいけない」と半分自嘲気味に語るビジネスマンの声もあった。

子供から大人へ、参加者からスタッフへと、双方向の学び合いが生まれた。ターゲットを限定しないからこそ、楽しい学びの場づくりができた。動態展示は当初のねらいを凌駕し、「コミュニケーションの場づくり」として大きな成果を生むことがわかった。

6. 新たな発見

今回動態展示と共に、来場者にモノづくりに参加できる機会を提供したが、そこから当初想定していなかった3つの新たな発見があった。

（1）ゆるやかな場が良質な学び合いを生み出す
今回の動態展示は「体験を伴う、考える機会の提供」を目的としたため、メニューや体験時間、料金などが決められていない“フリースタイルのワークショップ”であった。体験を商品化した講座や教室ではなく、フリースタイルとしたことで、参加者は「習う」のではなく「やってみよう」という気持ちで参加することができる。また“やりたいだけ”“やりたいところまで”など、参加のしかたを参加者自身で決められることも満足感につながっていた。

スタッフ側も“教える”のではなく“自分も一緒にやってみよう”という接し方が新鮮であった。あらかじめ用意されたプログラムがないため、スタッフ自身はその都度内容を自由に工夫しながら、参加者と一緒に楽しむことができる。当初マニュアルのない不安や緊張を感じていたスタッフは、結果的にその懸念を超えた喜びが得られたようだ。

そして動き、ライブ感のある動態展示では、人々が対面で接するため、対話がより多く生まれる。さらに体験に参加したこどもには、リモートでの学習が増えている現代において、“柿渋の匂い”など、五感で感じることの大切さに気づいてもらえる機会にもなった。

（2）アカデミー生にとっての意義 参加者だけで

はなく、私をはじめ、スタッフとして参加したアカデミー生にも意義があるものとなった。アカデミー生は一般より自然との共生に既に意識が高いと考えていたが、「あらためて自然と暮らしについて考えさせられた」「消費社会にいる自分にあらためて気づいた」「参加者から教えられた」「自分がやるべきことに気付いた」など、想定していなかった意見が出てきた。自分の身近なところでも、もっと話題とし学ばなければいけないと反省し、今回の学生スタッフを中心に情報の共有や提供などを継続していく SNS グループ「暮らしを考える動態展示部」を立ち上げた。

(3) コンテンツの魅力 「一昔前の暮らし」として使用したコンテンツ自体に、人々へ訴求する力があった。特に「藁(わら)」が持つ力を感じた。こどもも大人もスタッフも藁を(な)うことを面白がってくれる。人々は縛えるようになると止まらない——これは一体何なのだろうか？

その姿から、私たち日本人の記憶の奥にある、藁との繋がりが浮き出てきているように思えた。日本人は古来より、藁を身の回りのものをつくる資材として使ってきた。米文化とその副産物である藁は循環型で最も優れたエコロジカルな存在であり、我々にとって精神的に、そして輪廻転生など宗教的な概念に深く関わってきた。神社のしめ縄の多くが樹脂製になりつつある現代において、私たちは今一度、自然と共に生きる者としてのつながりを求めているのかもしれない。

7. 成果と課題、可能性

研究のテーマである「共に学び合える場づくり」の手法として、動態展示は有効であることが示された。さらに、“フリースタイルのワークショップ”が良質な学び合いを生み出すなどの新たな発見もあった。

一方で、参加者にとってイベントでの体験は、その場限りの楽しさで終わる傾向がある。本研究の「暮らしを考える」というテーマについて人々の実際の行動変容につながるためには課題が残った。

本研究を踏まえ、今後の活動方法について考察した。今回の参加者を興味・関心の違いにより、3つのグループに分類し、今後の関わり方について考える。「① 関心目録」はすでにプロジェクトとしてワークショップやエコツーリズムなど進めている人、または積極的に機会を求め参加交流をしている人である。そして「② 潜在層」として<関心はあるがその機会を受動的にししか持ち得ていない、漠然とした意識はあるが日常に流

今後この潜在層を中心にアプローチすることを考える



されている人>が多く存在することがわかった。私は今後、この層にアプローチし、人々の関心をより深めていくことが肝心であると考えている。「③無関心目録」もいるが「②潜在層」がより関心を深めていくことにより、振り向いてもらえることを期待している。

8. 今後のプロジェクト

今回の動態展示では場づくりの手法開発と検証と共に、既存施設への誘致につながる広報効果についても検証した。イベント時には、明宝歴史民俗資料館の民俗資料の展示とともに館のチラシを配布した。更に、入館券を事前に購入し、“心付け(投げ銭)”をいただいた参加者に渡した。その結果、実際に資料館を訪れた人もあり、資料館の関係者からは、動態展示をやってみてほしいという、今後につながる言葉をいただいた。

全国には、「三州足助屋敷(愛知県、morinosのような体験施設が多数ある。また「くまの体験企画(和歌山県)などのエコツーリズム、その他自然学校、自然や暮らしの体験イベントなど、動態展示が有効だと考えられるものが存在する。

そこで、今後も「②潜在層」を意識した動態展示を継続していきたい。この層を掘り起こし、様々な体験型施設につなぐことを私の第一の役割と考えたい。様々なマルシェ、イベント、ショッピングモールなどの商業施設、ホテルなどで、今回のようなワークショップを仕掛けていく。体験型の施設と連携を図り、「これからの暮らしを考える」きっかけづくり、さらに提携する施設への誘客とつなげることで、興味を持った人々がより深ぼりしてもらえる環境づくりをすることができると考えている。

また、実際に前職の取引先であったリゾートホテルでは、誘客のための体験プログラムのニーズがある。私自身が体験イベントを催行する他、今回の研究で明らかになったノウハウを基に、現地の施設や催行者にプログラムを実施してもらうことも考えられる。

それらを今後、私の“生涯続く”プロジェクトとしたい。

9. 最後に

今回、明宝歴史民俗資料館の関係者、(株)明宝マスタースターズに多大なご協力をいただいた。またコンテンツ作成についても多くの方々のお借りした。そして動態展示を手伝ってくれた学生スタッフをはじめ、多くの仲間を支えられた。この研究を通して起きたことは、アカデミーを一つの地域と例えれば“地域が助け合って暮らししてきた暮らしの再現”であり、「これからの暮らし」のひとつのカタチを示したのものなのかもしれない。